

京山幸太／咲くやこの花インタビューvol.41

京山幸太(きょうやま・こうた)【令和5年度 大衆芸能部門〔浪曲〕】



町田康「パンク侍、斬られて候」を浪曲化 新たな風を巻き起こす浪曲界の風雲児！

2013年に2代目京山幸枝若に入門し、2015年1月に「初夢で『見たよ、聞いたよ』浪花節」にてデビュー披露した京山幸太さん。2022年には文化庁芸術祭賞新人賞(大衆芸能部門)も受賞した注目の若手浪曲師です。若手による上方伝統文化芸能ユニット「霜乃会」のメンバーとして、また一方ではお笑い芸人としても活躍中です。

2022年に町田康さんの時代小説「パンク侍、斬られて候」を浪曲化して高い評価を得た幸太さんは、2023年も町田さんとタッグを組んで新作に挑戦しています。「時代の匂いをかぎながら、浪曲の新しいムーブメントを起こそうとする熱意とオリジナリティあふれる工夫は将来性を感じさせる。新作だけでなく、古典も力強さと勢いを増しており、芸の継承という観点からも関西浪曲界を担う存在としてさらなる飛躍が期待される」という受賞理由にもあるように、古典浪曲から新作浪曲まで幅広く口演、年間100公演以上の舞台に立っています。

取材・文／岩本和子

ヘビメタ発、ジャズを経由して浪曲へ…その変遷とは？

受賞おめでとうございます。つきなみですが、まずは受賞のご感想を教えてください。

浪曲界では真山隼人兄さん以来の「咲くやこの花賞」ということで、割と短いスパンで取れたというのも浪曲界にとって話題になってくれたらと思いますし、世間が浪曲界に関心を持つきっかけになったのであれば、私個人もですが、浪曲界にとってもありがたいことだなと思います。



師匠にご報告された時は、なんとおっしゃっていましたか？

もちろん喜んでくれました。冗談を言う方なので「他におらんかったんかな？」と言ってましたが(笑)。

2013年の入門は、高校を卒業したタイミングだったのですか？

兵庫県出身なんですが、2013年の春に大学進学のために大阪に来て。兵庫県を発つギリギリ前に浪曲というものを知りました。調べたらのちの師匠である京山幸枝若という人が吹田市で教室をやっていることを知って。3月に初めて師匠の教室に見学に行って、お会いしました。

中学生まではメタルバンドをしていたそうですね。

ヘビーメタルとか、ロックを中学3年生までやっていて、高校にかけてブルースとか、ジャズが好きになって。音楽の道で食べていこうと思って中高一貫の学校を高校1年生で辞めさせてもらいました。そ

れからはバイトをしながら通信制の高校に行って、ジャズバーでバイトをしていました。そこで出会ったジャズのベースの先生に、ウッドベースとかエレキベースとか、音楽理論とかいろいろ学びました。

全くジャンルが異なりますが、どういう経緯で浪曲を知ったのでしょうか？

ベースをやっていましたが、作曲家もしたいなという思いもあって。ジャズもブルースも好きなんですけど、借り物というか、日本人が代々してきたものをしたいなとちょっと思っていて。そのころからキャンディーズの「年下の男の子」を作曲した穂口雄右先生のSNSをフォローしていて。ダメで元々でいいやとDMを送って、「こうこうこうで音楽でやっていきたいです」と。で、「日本の音楽もちょっと興味あります」とチラッと書いたところ返信をくださって、「日本の音楽とか芸能は元々、浪曲にルーツを持っているものが多いし、絶対に聴いた方がいいですよ」と教えていただきました。だから、キャンディーズから浪曲を知ったという感じです。



すごい飛躍ですね(笑)。

そうなんです。世代的に浪曲という言葉も聞いたことがなかったので、調べてみたら、ネットで三波春夫さんと村田英雄さんのかけあい浪曲みたいなものがあって。それは「忠臣蔵」だったのですが、それも知らなくて。「忠臣蔵」ってなんやろと思いながら見たのですが、今まで音楽をやってきましたけど、演じながら語るという芸は初めてで。それで興味を持って、師匠の教室を見つけたところに繋がります。

大学に進学されたのも、音楽をやろうと思って？

浪曲を知るまではクラブミュージックとかにも興味があったので、クラブミュージックが盛んらしいドイツに留学しようと思い、外国語大学を選んで入学しました。でも、その直後に日本の伝統芸能にハマっちゃって、行く意味なかった(笑)。

そうなんですね。

自分は芸なり、音楽なり「その道で食べる」と決めていたから、趣味で始めるのは嫌で。そもそも浪曲は職業として成り立っているんだろうかという不安もありました。それで最初に調べて出てきたのが、過去の「咲くやこの花賞」受賞者の春野恵子お姉さんでした。頑張りようによっては職業として成り立っているんだと思って、さらに調べて、メディアで観るのと生とでは全然違うということは知っていたから、じゃあ生で観てみようと思って。今思えば、舞台を観に行けばよかったんですけど、いきなり教室に行って。その時、師匠が生徒さんに見本を見せるんですけど、浪曲独特のかすれた太い甘い声とかがむちゃくちゃかっこいいなと思って。なんとなく、これは一生やることなんだろうなと思って、その日に弟子入り志願しました。



弟子入り志願した時、師匠は何と？

「気持ちはわかるけど、声も聞いてみいひんと分からへん。才能もいる。でも、なんでそんな思うの？」と聞かれて。そこで、「分からないですけど、ちょっとネットで調べた感じでは、演者も、お客さんも、若返りが進んでなくて高齢化している。10代(当時)の私みたいな人が入ったら、たぶん話題になるし、若いお客さんも演者もまた入ってくると思うので、私を弟子にした方がいいんじゃないですか」と言いました(笑)。

すごいですね(笑)。

「なんでお前が上からやねん」って言われましたけど(笑)、それを許してくれる師匠でよかったです。門前払いでもおかしくなかったのですが、生意気でしたね…。でも師匠はあとで「生意気やけど、芸能界なんてのは言わば押しのけて勝たないかん世界やから、それは向いてるなと思った」と言ってくれました。

入門後はしばらく学校と弟子の生活で。

大学は辞めようかなと思っていたんですけど、師匠が「同世代の子と関わることも大事」だと。今の感覚も持っておかないとダメだし、浪曲以外の世界、例えばタレント活動とかした時に「大学に行っていた」って言うだけでもクイズ番組とかいいと思うからって。師匠は吉本興業でお笑いとか、落語家の方と共演しているから、売れる大事さが身に染みておられるんだと思うんです。売れたら集客に困らないし、集客に困らないということは芸に集中できる。だから「売れろよ」とは結構言われますね。



浪曲師とお笑い芸人、二足のわらじで活躍！

一方で、お笑い芸人もされています。

そうですね。2019年からSMA(ソニーミュージックアーティスト)でお笑いをしています。

どういうきっかけで所属されたんですか？

例えば講談の神田伯山さんとか、東京だとメディアの強さがあると思うのですが、関西にいて売れるとなると浪曲だけじゃ絶対厳しいぞと師匠が言っていて。違うジャンルも挑戦するべきやし、それもまた浪曲に帰って来る。でも役者とかでもないしな～と思って、一番何が好きなのかと考えて、お笑いを選びました。それで、東京のテレビに出るには東京の事務所が早いなと思ったのと、プラス、SMAはピン芸人が多い事務所で、自分もピンだから向いてるかなと。あとは、養成所に入らなくていいということもありました。SMAもエージェント契約でいいと言ってくれたので、浪曲はノータッチでいいですと。そういう、いろんな条件面が良かったからですね。エージェント契約にしてもらっている芸人はSMAの中でも私が唯一ですね。大阪で浪曲の舞台があるのはSMAのチーフマネージャーも分かってくれているので、スケジュールが合うときにライブとか、テレビとか、オーディションに来てくれたらいいという感じです。

2018年からは浪曲師とピン芸人という二足の草鞋で。

はい。お笑いを始めてから自分で浪曲の新作を書いていて、自分の中ではお笑いは結構、大きいです。半分は浪曲、半分はお笑いと、同じくらい力を入れてやっているんで、お笑いをやってるから、この曲が書けたとか、実はそういうことが多いです。

お笑いと浪曲では、たとえばお客さんも全然異なりますよね。

そうですね。特にお笑いで浪曲を使うにあたって、浪曲って世間からどう思われているのだろうと考えます。京山幸太って、どう見えているんだろうと、徹底的に自分自身を見つめ直すざるを得なかったですね。お笑って、そういうジャンルじゃないですか。自分がどう見えているか。それを逆手にとってお笑いにするので。自分はどういうキャラか、浪曲は世間からどう見えているのか。そうやって改めて浪曲を客観視して、分析できました。お笑いのフィールドだと「浪曲師」というキャラ。だから浪曲師はどんなイメージかちゃんと把握しておかなくてはいけなくて、それを冷静に見られたのは良かったなと思います。



若い世代にはそもそも「浪曲師」が分からない方もいると思うのですが、その壁はどう乗り越えているのでしょうか？

浪曲師としては一番悲しいですけど、本当に浪曲を知らへんものやから、例えば「こんな浪曲師はイヤだ」というネタは書けないわけです。じゃあ、分かれていないものとして、それを逆手にとって浪曲を使えばいいやという感じです。まずは入り口になれば。古典浪曲ももちろん面白いですけど、町田康さんの作品は分かりやすくて、すぐ面白いと思ってくれると思うので、浪曲がブレイクするには、きっかけだけちゃうかなと思いますね。

町田康からもらった最高の誉め言葉

今、町田さんのお名前があがりましたが、「咲くやこの花賞」受賞理由の一つに、作家の町田康さんの小説「パンク侍、斬られて候」の浪曲化があります。こちらは、どういうきっかけでコラボが実現したのでしょうか？

「十三浪曲寄席」という会がありまして、奇数月は真山隼人兄さんで、偶数月は京山幸太がレギュラーをしています。その「十三浪曲寄席」で特別公演をするときに、町田康さんが「河内十人斬り」をモチーフにした「告白」という小説を書かれていて、どうやら浪曲もお好きだと知っていたので、ゲストに来てもらえないかと言っていたら、出演のOKが出て。「河内十人斬り」はうちの持ちネタなので、町田さんとのトークを挟んで前編・後編を聞いてもらおうと。その「十三浪曲寄席」が初対面でした。

その後、別の対談で町田さんの方から呼んでくださって、その時、「幸太さんが僕の作品を浪曲にするとしたら何ですか？」とちょっと振ってくれたんです。そこでパッと出たのが「パンク侍、斬られて候」でした。そしたら本当にやらせていただけることになりました。



原作ありきの浪曲を作られて、手応えはいかがでしたか？

それまでは「なんかギャルが踊る浪曲があったらいいな」と思って自分で作ってきましたが、原作から浪曲を作ったのが初めてで。原作を預かった責任があるので、ちゃんとしな、みたいな気持ちはありましたね。もちろん、それまでもちゃんとしているつもりですが。それと、浪曲には節があるのですが、節があると一つの言葉もゆっくり言うことになるので、尺(時間)を取るんですよ。浪曲となるとだいたい30分に収めないといけなくて。本にしたら10ページあれば浪曲になるのですが、「パンク侍」を全部浪曲にしたら12時間くらいかかっちゃう。町田さんは「どう変えてもいい」とおっしゃっていましたが、変えることによって時系列が狂って、それを合わせるため自分で想像の場面をこしらえないといけなかったり。全部は描ききれへんで、人物や場面を取捨選択することが大変でした。さらにそこからどこを節にして、どこを啖呵(セリフ)にするかということも、私が選んで構成していかないといけないので、二重の構成を求められるというか。物語プラス節・啖呵の構成があって。今度はどういう節の作曲の部分もあって、かなり大変でしたね。

とはいえ「どう使ってもいいよ」と言ってもらえるってのは嬉しいですね。

むちゃくちゃ嬉しいですね。自分の作品やし、ここは変えんといてとか、こだわりがあるはずなんですけど、「もう何とでもしていいです」と。「パンク侍」の浪曲版が出来上がって、町田さんに「十三浪曲寄席」に来ていただいて、聞いてもらったのですが、「今回、幸太さんが浪曲にするにあたって、むちゃくちゃ改編されているはずなのに、どこを僕が書いて、どこを幸太さんが書いたかわからなかった」みたいなことをおっしゃってくれて、最高の褒め言葉だなと思いました。



このコラボをきっかけに、また新しいものも生まれましたか？

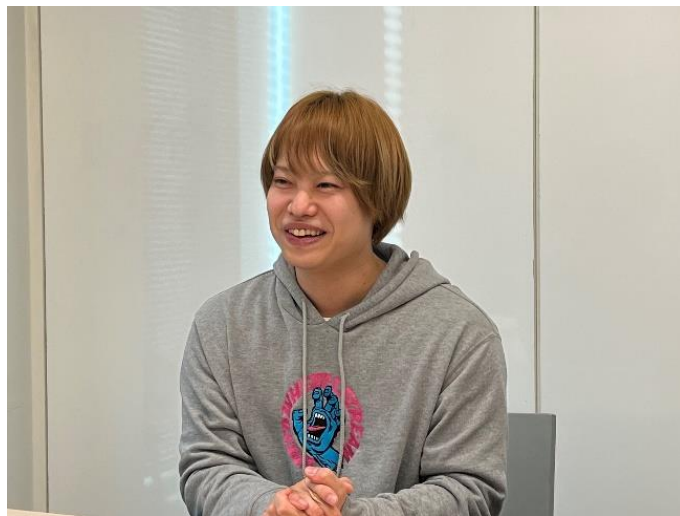
今、取り組んでいるのが、「三条凡児」シリーズというもので、町田さんが浪曲のために原作を書いてく

ださっています。町田さんはあえて余白を残して書いてくれてるんですよね。ざっくりと物語だけ送られてきて、それに対して自分が浪曲に仕上げるという共作みたいな感じで作っています。「三条凡児」シリーズは、架空の昭和のプロレスラーの一代記で、今は二話までやっています。まだ中学生なので、ここから何年もかけてプロレスラーになる。何年か越しの仕事になると思いますが、これからどうなるか自分も楽しみです。

目下、全盛期に向かって邁進の日々

将来、目指す浪曲師像はありますか？

今、29歳ですが、30代までは浪曲の入り口になれる存在になりたいです。そして、40代でどれだけバリバリのことができるか。今は、そこを目がけて築いている感じがします。浪曲は40代が全盛期だと思うんですよ。体力もあるし、声もあるし。歳をとると浪曲師はどうしても高い声が出なくなる。息も持たなくなってくるし。もちろん名人はその点を芸でカバーできるのですが、芸ができて、体力があって、声が出るというのは40代から50半ばくらいだと思うので、その年代で知名度と芸の力をどれだけピークにしていくかというのが一番課題というか、芸人として大事にしないあかんことかなと思います。これから10年は、そのためにできることをしていこうと思っています



最後に、幸太さんが大阪市内に「咲くやこの花賞」を贈るとしたら、大阪市のどこ、または何に差し上げますか？

「育て上手なお客さん」です。浪曲は特にそうなんですけど、東京はどんな若手でもとりあえず拍手をしてくれる。東京はやらせ上手。関西は結構シビアなんですよ。若手は頑張っている姿が観れたらいいんですけど、ちょっとベテランの人が声が裏返ってしまうと全く拍手しない。関西は育て上手。芸人にとって、関西のお客さんは、わかりやすくて、実力をつけるためにもむちゃくちゃいい。何でも褒めないけど、よかったら祝儀もくれたりして、むちゃくちゃありがたいです。